

異世界でカフェを開店しました。 2

登場人物紹介

エドガー殿下

フェリフォミア王国の王太子。
金髪碧眼のザ・王子様。
今回、リサとの縁談が
持ち上がる。

好きな食べ物：ハンバーグ

アラン

カフェの新しい従業員。
王宮の見習い料理人だった。

好きな食べ物：バンケーキ

オリヴィア

カフェの新しい従業員。
幼い息子をもつシングルマザー。

好きな食べ物：肉じゃが

ヘレナ

カフェの接客担当。
実家はパン屋を営んでいる。

好きな食べ物：アイスクリーム

ジーク

元騎士で、カフェの調理担当。
リサへの気持ちは、
ただの尊敬だと思っていたが……？

好きな食べ物：プリン

バジル

リサを見守る緑の精霊。
体長約20cm。

好きな食べ物：卵焼き

キース

王宮の副料理長。
雰囲気はチャライが、
料理の腕は確か。

好きな食べ物：から揚げ

リサ(黒川理沙)

異世界にトリップした元OL。
カフェ・おむすびの店長。
地球の美味しい料理を広める
ため、日々奮闘中!

好きな食べ物：和食

目次

異世界でカフェを開店しました。	2
ある少年の奮励 ^{ふんれい}	205

異世界でカフェを開店しました。 2

プロローグ

フェリフォミア王国の王都。中央通りから道具街に入って少し歩いたところに、ごちんまりとした店がある。

鮮やかな赤いドアの上にある吊り看板に書かれた店名は、カフェ・おむすび。

誰も食べたことのないようなおいしい料理が評判で、今では王都のみならず、国内外に広く知れ渡るようになった。

けれど、その店が異世界からやってきたリサという女性によって営まれていることは、ごく一部の人しか知らなかった。

「すみませ〜ん、注文お願いします！」

「はい、ただいま！」

ある日のお昼時。カフェ・おむすびは開店直後だというのに、早くも大勢のお客さんでにぎわっていた。

「私はこの、おむすびランチセットで」

「私も同じく」

年若い二人組の女性客が、メニューを指差しながら言った。

「かしこまりました」

黒の制服を着たショートカットの女性が、にこやかに頷きながら手元の紙にメモしていく。

「付け合わせをお選びいただけますが、どれになさいますか？」

「お飲み物はお付けしますか？」

などと質問して要望をスムーズに聞き取った後、一礼して店の中央にある大きなカウンターに戻っていった。

その後ろ姿を見つめながら、注文した二人のうちの一人が呟く。

「早く来ないかなー」

「本当にねー！ でも、今日はすんなり入れてよかったね！」

「そうそう。ていうか、もうあんなに並んでるし！」

窓の外では、席が空くのを待つ人が何人も並んでいた。店内を覗いて混雑具合に残念そうな表情を浮かべ、テイクアウト用の料理を買って帰る人もいる。

そんな人達を見ながら、二人の女性客は小さな優越感を覚える。

そうしているうちに、注文を取った店員とは別の女性店員が、二つのプレートを手近づいてきた。

彼女はにつこりと笑って、料理が載ったプレートをテーブルに置く。

「お待たせいたしました。おむすびランチセットでございます」
「来た来た！」

プレートプレートの左側には二種類のおむすび。そして右側には、ほんわりと湯気がのぼる具きたくさんのお味噌汁みそ汁。さらに緑の野菜の和え物あひが入った小鉢と、卵焼きが添えられている。

二人の女性客は目の前の料理に釘付けになった。

その様子を微笑ましそうに見つめながら、店員の女性はプレートの上の料理について簡単な説明をする。そして二人のはやる気持ちを察してか、早々に立ち去った。

二人はさっそく手にフォークを持ち、二種類のおむすびのうち、どちらを先に食べようかと悩む。

一方は、白いごはんごはんに、ところどころ混ざったグリーンやピンクの色彩が美しい。もう一方は、表面がこんがりこんがりと焼かれ、黄金色の光沢こがねいろを放っていた。

少し迷った後、二人は互いに別の方を選んでフォークを付ける。

切るようにして掬すくい、一口頬張ほおばると、二人は期待に輝いていた瞳を大きく見開いた。

「おいし〜！」

「ほんとにね！ 私も今度はそつちを食べてみよう」

「私も！」

きやあきやあ言いながら、みるみるうちに料理を平らげる。

そして二人は、食後のお茶を飲んでようやく一息ついた。

「おなか一杯！」

「おいしかった〜！ いつもだけど」

「だねー！」

彼女達は満足げな表情で頷うなずき合う。

「ねえねえ、料理持つてきてくれた、あの人が店長さんなんだよね？」

「みたいだよ。まだ若いのに、すごいよね〜」

「あたし達と、そんなに変わらないように見えるもんね……」

料理を運んだり、他の店員に指示を出したりと、忙しそうに働く店長の女性。

一つにまとめた長い黒髪をなびかせ軽やかに動き回る彼女の姿を、二人は感心しながら見つめていた。

第一章 定休日でもやることはたくさんです。

普段は大勢の客でにぎわうカフェ・おむすびの店内に、今はわずか三人しかいなかった。

それもそのはず。今日は定休日なのだ。

テーブル席に座る三人は、目の前に並ぶ数種類の料理を少量ずつ口にしては、真剣な表情で話し合っている。

「じゃあ、今週の日替わりランチはこれでどうかな？」

他の二人にそう問いかけた黒髪の女性は、リサ・クロカワ・クロード。元は黒川理沙という名前だった彼女は、およそ一年半前に突然、別の世界からやって来た。そして、ひょんなことからこのカフェを経営するようになったのだ。

日本人特有の薄い顔立ちと、黒目がちでぼつちりした目のおかげで、こちらの世界では若く見えるらしい。女性としては嬉しいが、「こんなに若い女の子に店の経営なんて出来るの!？」と心配されることもあり、カフェのオーナー兼店長としては複雑だった。

その隣で頷いている男性は、ジーク・ブラウン。カフェでは主に調理を担当している。元騎士である彼は、背が高く、細身ながらも筋肉質だ。銀色の髪と青い瞳を持ち、整った顔をしている。

だが、その顔に喜怒哀楽の色が浮かぶことはほとんどない。今も頷くことで同意の意思を表しているものの、顔は無表情のままだ。

そのため一見、冷たそうな印象を与える。しかし、本当は優しさと男気を併せ持つ、熱い男である。

クールな見た目からは想像がつきにくいのが、スイーツ男子でもある。騎士団を辞めてカフェで働き出したのも、リサが作るお菓子に惚れ込んだことだ。

「いいと思います」

二人の向かい側に座り、明るい声でリサに同意している女の子は、ヘレナ・チェスター。オレンジ色の髪をショートカットにした彼女は、カフェでは接客を担当している。

実家は古くから続くパン屋を営んでおり、店の売上げが落ちたのをカフェ・おむすびのせいだと考えて逆恨みし、異臭騒ぎを起こそうとした。だがすのでところで取り押さえられ、その償いのために働き出したのだ。

初めはその事件のこともあってなかなかじめなかったものの、彼女自身の努力により、今ではカフェのメンバーとして欠かせない存在になっている。

そんな三人によって、このカフェ・おむすびは運営されていた。

開業して一年が経つ。

最近までは、七日に一度の国民の休日である休息日のみ休業していた。だが連日の盛況ぶりに、三人の従業員で対応するのが厳しくなってきた。

そこで、料理や接客のクオリティを維持するために定休日を一日設け、週に二日、お店を休むことにしたのだ。

ただでさえなかなか入れない店なのに、とお客さんから文句を言われたりもした。だが、無理をすることで料理や接客のレベルが下がっては本末転倒。

従業員を増やすという手もあったし、実際、雇ってほしいと言ってくる人も多い。だがカフェ・おむすびの味を盗もうと企む人や、人気店で働きたいだけのミーハーな人、イケメン店員のジークとお近づきになりたい人……といったように動機が不純な人ばかりだし、また店側としても新人教育をする余裕はなかった。

忙しそうな三人を見かねて、リサの友人でもあるアンジェリカがしばしば手伝ってくれる。これには大いに助かっているが、カフェの左隣に建つサイラス魔術具店の看板娘であるアンジェリカには、魔術具店の仕事もある。

店主であるリサはかなり迷ったものの、断腸の思いで休業日を増やすことを決めた。

休業日はおのおの完全に休むことにし、定休日はお店に集まって次週のメニューについて話し合ったり、新メニューを開発したりすることにした。

今日も、お店のテーブル席に試作品を並べ、三人で摘まみながら話し合っている。

「数も問題ないかな？」

「こっちのケーキを多めに作ることで出来ますか？ この前、完売後も注文されるお客様が結構多くて、仕方なく別のケーキをお勧めしたので……」

「なるほど！ じゃあ、こっちを多めにして、その分もう片方を減らすことにしようか」

リサはその日の売り上げ数と廃棄数の記録を見ながら、作る数を決める。横にいるジークにそれを見せると、彼も問題ないと頷いた。

打ち合わせが終わる頃には試食用の料理は冷めてしまっていたが、昼食として残さず食べた。その後、三人は翌日からの営業に向けて準備を始める。

ヘレナは紙ナプキンや持ち帰り用の紙袋などの消耗品を補充したり、普段は手が回らない部分を掃除したりと、二階の倉庫から店先までせわしなく動き回っている。リサとジークは翌日のメニューの仕込みを行ったり、作り置き出来る料理を作ったりしている。

営業日にはぎやかなカフェの店内に、この日ばかりは三人が立てる音だけが響いていた。

第二章 ヘレナ、悩みます。

ランチタイムが終わって忙しさのピークを過ぎたころ、カフェの店内に陶器の割れるけたたましい音が響いた。

「失礼しました！」

お客さんが帰った席を片づけているときに、不注意でお皿を床に落つことしてしまったのだろう。ヘレナが周りのお客さんに謝罪している。

食器を割るのは今日だけで三度目。割れた陶器の破片を片づけ終えたヘレナは、お客さんから見えないところで、ふうとため息を吐く。

その様子を見て、リサは心配そうな表情を浮かべた。だがカフェは今日も大忙しで、話をする時間はない。

その後、ヘレナはなんとか持ち直し、無事に営業を終えた。

「ヘレナ大丈夫？ なんか今日はいつもと違ってたけど……体調でも悪かった？」

閉店後、厨房の片づけがひと段落したりリサがホールにいるヘレナに近寄り、そう問いかけた。

「リサさん……今日はすみませんでした。食器を三つも割ってしまつて……」

「それはいいんだ。あ、割つていいつてことじゃないんだけど……。それより何かあった？」

ヘレナは紙ナプキンを畳んでいた手を止め、リサをじつと見つめる。

「リサさん、今日少し時間ありますか？ 相談したいことがあるんです」

リサは快諾し、厨房に戻つてジークに先に乗るよう伝えた。

カフェの二階。そこは前の店主夫妻が住居として使っていたが、今はスタッフの休憩所や備品の倉庫として使われている。

かつてリビングだった部屋には休憩用の大きなテーブルが置かれていて、リサとヘレナはそこに向かい合つて座つた。

ヘレナは十七歳。この世界での成人年齢だが、リサが元いた世界では未成年に当たるため、なんとなくお酒を飲ませるのは憚られる。何より深刻そうな悩みを聞くのだから素面の方がよいかと、リサはリラククス効果のあるお茶を淹れた。

そして、目の前に座るヘレナに問いかける。

「それで、どうしたの？」

お茶を飲むでもなく、ただティーカップを手元で揺らしていたヘレナは、ふうと息を吐くとカップを置いて顔を上げた。

「リサさんつて、結婚とか考えてますか？」

「へへ？」

自分より六つも若いヘレナの口からいきなり結婚という言葉が出てきたので、リサは驚きのあまり変な声を出してしまつた。

「結婚つて……いや、もちろんゆくゆくはしたいと思うけど、それは相手がいって初めて成立するものであつて……なあと、ヘレナ結婚したいの？」

少し茶化すように問いかけたリサは、ヘレナの表情が曇つたままなので、失言だったかな、と思つた。

「あの、リサさんがいた世界ではどうかわかりませんが、この世界では成人したらすぐ結婚するつて子も多いんですよ。というか、言いくいんです……リサさんの年齢で独身の人は少ないです」

「成人してすぐつて……え、十六歳で結婚!? 早くない!？」

「十六歳で婚約して、十八歳から二十歳くらいの間に結婚つてのが一般的ですかね」

「……確かに元の世界でも、法律上は十六歳で結婚できたけど……」

「あ、そうなんですか？」

「うん、でもそういう子は本当に少なく、ほとんどの子は二十代になってからだね。晩婚化で、三十過ぎてからつて人も増えてたしなあ」

「へえ〜」

「じゃあ、ヘレナも結婚したいと思つてるんだ」

「結婚したいというか、結婚しようと考えていた人がいるんです」

「ええ！ ヘレナ彼氏いたの!？」

「はい、最近はまだうまくいってなかったんですけどね」

「もしかして、今日様子がおかしかったのもそれが原因？」

「そうです。とはいっても、もう彼とは終わってたんなんです。でも、うまくいかなかった理由が納得できないというか……なんかもやもやして、いろいろ考えちゃって……」

ヘレナにそんな相手がいいたことを全く知らなかったリサは、驚くとともに動揺していた。だが相談を聞く側が動揺してはどうすると思ひ、冷めてきたお茶をグイッと飲んで心を落ち着かせる。

「結婚を考えてるとか考えてないとかは関係なく、彼氏と別れるときには少なからず心残りがあるものだと思うよ」

「それはわかってるんですけどね……」

ヘレナが言うには、その彼とはヘレナの家が営むチェスターパン店が傾きかけた頃に付き合い始めたらしい。家のことで思い悩むヘレナを、よく元気づけてくれたとのこと。

チェスターパン店が傾きかけたのはカフェ・おむすびが出来たことも原因の一つなので、リサは少し罪悪感を持っていた。だがヘレナの口ぶりからカフェへの恨みなどは窺えなかったため、リサはホッとす。

彼との付き合いは、ヘレナがこの店で働くようになってからも順調に続いていた。チェスターパン店が経営を立て直し、以前のような活気を取り戻したときも、彼は喜んでくれたらしい。

しかし、そんな二人の関係が、あることをきっかけに変わった。長男である彼が「自分は家業を継がないといけないから、結婚したらもちろんお嫁に来てくれるよね？」とヘレナに言ったのだ。

当然のように言われたヘレナは驚き、つい「なんで？」と言ってしまった。すると、そう返されるとは思っていなかったらしい彼が激怒し、そのまま口論になったという。

彼は長男だが、ヘレナもチェスターパン店の一人娘である。彼女も家を継ぐ立場であることを全く考えていない彼に、ヘレナは腹が立った。

だが、頭に血がのぼった彼が言った思いがけない言葉に、ヘレナは打ちのめされた。

——いっそのこと、パン屋が潰れてしまえばよかったのに……

代々続くパン屋を潰すまいと一生懸命な父をずっと見ていたヘレナには、到底許すことが出来ない一言だった。

それに、あんなに親身になって家のことを心配してくれた彼が、本心ではそんなことを考えていたのか、と裏切られた気分にもなった。

言ってしまったから、彼もしまったと思っただけで本心ではないと言ひ繕ったが、その日から二人の関係はぎくしゃくし、昨日ついに別れたという。

「見かねた父が、無理して店を継がなくてもいいって言ってくれたんです。もちろん私の夫になる人に家を継いでもらえたら嬉しいけど、だからと言って好きでもない人と結婚してほしくないって」

「そうかあ、そうだったんだ……」

途中で泣きそうになりながらも、ヘレナは話し終えた。その様子から、後悔や不安、怒り、そしてやりきれなさといったいろいろな感情が伝わってくる。

「今思えば、お嫁に来てくれるかと聞かれたとき、私がもう少し慎重に言葉を選んでいたら、彼もあんなことを言わなかったかもしれない。今さら言っても遅いんですけどね」
そう言って、ヘレナは力なく笑った。

もし彼の家が商売をやっていたらどうか、ヘレナが一人娘でなかったらどうか、彼が言ったようにチェスターパン店がそのまま潰れてしまっていたらとか……

「たれば」を考えても意味はないけれど、彼との別の未来があったかもしれないと、ヘレナはつい考えてしまう。

彼の言葉に傷ついたとはいえ、心底嫌いになったわけではない。ヘレナが辛かったときに支えてくれたのは紛れもなく彼だったし、パン屋が立ち直ったときに喜んでくれたのも、嘘ではなかっただろう。

「うまくいかないものだなあと思ってた」

ヘレナは寂しそうに呟いた。そしてすっかり冷めてしまったお茶を一口飲んだ後、また一つため息を吐いたのだった。

第三章 大変な依頼をされました。

「結婚かあ……」

自宅に帰った後、リサはベッドに寝転がってヘレナの話の思い出していた。

リサ自身、いつかは結婚したいと思ってはいるものの、具体的に考えたことはなかった。そのため、ヘレナにもどんな言葉をかけたらいいかわからなかった。

だが、ヘレナ本人はただ話を聞いてほしかっただけのように、幾分かすっきりした様子で帰っていった。

ヘレナと彼、どちらのせいということもなく、タイミングの悪さやちょっとした失言が重なり、うまくいかなかったのだろう。

「そりゃ、もやもやもするよね」

ヘレナのそれが伝染ったかのように、リサもはあとため息を吐いた。

「マスターもお悩み中？」

バジルが、仰向けになったリサの顔を上から覗き込んで言った。バジルは、リサがこの世界に卜りっぱしたときからそばで見守ってくれている小さな精霊だ。

「私が悩んでも仕方ないことなんだけども。考えちゃうのもわかるなーって思ってた」

「結婚というものをですか？」

「結婚、というより二人の関係について、かな？ うまくいかないものだなあって言ったヘレナの気持ちも、わかる気がするんだよね」

リサも似たような経験があるのだ。

最後に付き合っていた彼とは、リサが短大を卒業して就職してから、会える時間が少なくなっていった。さらに大学生の彼と社会人のリサでは考え方や話題が合わなくなっていく、それらが積み重なって別れることになった。

その彼のことを嫌いになったわけではない。別れた後も、友人の一人として付き合いは続いた。けれども、恋人としての関係を続けていくことは出来なかったのだ。

どちらが悪いというわけではない。けれど、小さなすれ違いが重なって、次第に修復できない傷となり、お互いの心を苛んでいく。

ヘレナ達の場合、彼の失言が引き金になったとはいえ、ヘレナがカフェで働き始めたときからずれ違いは始まっていたのだろう。

それまで会えていた時間が減って、ヘレナの意識も恋人より仕事の方に向いた。彼をないがしろにしたつもりはないが、結果的に優先順位が下がってしまったとヘレナは語っていた。

自分の経験とヘレナの状況は違うが、そのやりきれなさはわかるのだ。

「……人間って難しいですね」

そう言って首を傾げたバジルに、リサは苦笑する。精霊には、結婚や恋愛というものは理解でき

ないようだ。

「そうだね、人間って本当に難しいよね」

その難しい問題が近々自分の身にも降りかかるとは知らず、リサはそのまま眠りについた。

翌日。リサはいつものように、朝食の席で義理の両親であるギルフォードとアナスタシアと顔を合わせた。

「おはようございます」

既にテーブルについて食前のお茶を飲んでいたアナスタシアと、新聞を読んでいたギルフォードから、それぞれ挨拶が返って来る。

彼らは異世界からやってきて行き倒れていたリサを介抱し、養子にしてくれた心優しい夫婦だ。ギルフォードは王宮の筆頭魔術師であり、侯爵位をもつ。髪の色はリサが元いた世界でもおなじみの茶色で、いつもシルバーグレーの目を細めて笑っている。

彼の隣に座るアナスタシアは、リサの元の世界ではありえないピンク色の髪と、紫の瞳をもっている。アラフォーだが、外見も内面もそうとは思えないほど若々しい。

彼女はシリルメリーという有名な服飾店のオーナー兼デザイナーであり、女性達の憧れの的だ。また、実家はアシュリー商会という大きな商社を営んでおり、リサもカフェの食材を調達する関係でお世話になっていた。

リサがテーブルに着くと、侍女の皆さんが朝食を運んできてくれたので、三人揃って食べ始める。

それぞれの今日の予定などを話していると、ギルフォードが思い出したかのように「あつ」と声を上げた。

「そうだ。リサちゃん、明日はカフェの定休日だよね？」

「はい、そうですけど」

「予定あったりする？ あつたらあつたで全然いいけど」

「特にありませんけど、何かあるんですか？」

それを聞き、ギルフォードはなぜかがつくりと肩を落とした。

リサとアナスタシアはわけがわからず、二人で顔を見合わせる。

「ロイズのやつが、リサちゃんに話があるから家に来るって言ってるよ」

「ロイズさんがですか？」

ロイズ・ウオーロックは王宮の文官省の長官で、ギルフォードの友人だ。仕事の好き嫌いが激しいギルフォードを諫められる、数少ない人間でもある。

お互いに何だかんだ文句を言いつつも学生時代からの付き合いというのだから、仲は悪くないのだろう。

「それが、何の話かは全然教えてくれなくて。どうも、ろくでもない話のような気がするんだよね」

「私に話ということは、王宮会談のときみたいな依頼でしょうか？」

「うーん、どうだろうか」

「とにかく、聞いてみるしかないんじゃないかしら。私もロイズさんに会うのは久々だから、夕食も召し上がっていただいたら？」

アナスタシアがにこにこして提案すると、ギルフォードは「ええ」と嫌そうな声を上げた。だがアナスタシアが「んん？」と笑顔で畳みかけると、渋々ながら頷いた。

結婚してからもいろいろあるようだ、と二人の力関係を垣間見たリサは思った。

リサは、いつもと同じように中央広場のマーケットを覗きつつカフェへ向かった。午前中だけ開かれるマーケットには、その日とれた新鮮な野菜や果物、魚介類などが並ぶ。

特定の季節にしか出回らない食材や珍しい輸入品など、来るたびに発見があった。それらについて店員と会話するのも楽しく、どんな料理に使うかと想像が膨らむ。

普段、カフェで使っている食材はアナスタシアの実家であるアシური商会から定期的に仕入れているが、ごく限られた農家でしか作っていない食材などは、ここで購入している。

野菜と果物を何種類か買ってカフェに向かう途中、ヘレナと会った。「昨日は遅くまでありがとうございました」とお礼を言った彼女は笑顔だったので、リサは安堵する。

それどころか、「新しい彼探さない」と早くも意気込んでいた。

その直後の、「リサさんも急がないと嫁ぎ遅れますよ」という言葉は余計なお世話だったが……リサ達のすぐ後に出動してきたジークも、いつもの調子を取り戻したヘレナを見て、ホッとしたようだった。

その日はヘレナが食器を割ることもなく、無事に営業を終えた。

翌日の定休日。ロイズがクロード家を訪れた。

彼は白いシャツに棒タイをしめ、かっちりとした黒いジャケットを羽織っていた。長めの濃紺の髪を後ろでまとめ、切れ長の目にシルバークレームの眼鏡をかけている。

執事のレイドに案内されて応接室へやってきたロイズは、険しい表情のギルフォードをスルーして、アナスタシアに挨拶する。

「本日はお忙しいところ、お邪魔して申し訳ない」

後ろで「本当になー」と声を上げたギルフォードをひと睨みで黙らせたアナスタシアは、淑女らしく綺麗な礼でロイズを迎えた。

四人でソファに座るとアナスタシアとロイズを中心に世間話のような会話が始まり、和やかな時間が流れる。

ギルフォードがやや落ち着いたところをみはからって、アナスタシアが本題を切り出した。

「それで、リサちゃんにお話があると伺いましたが、どういった内容なのかしら？ 私達は聞かない方がいいの？」

「いえ、むしろ同席していただいた方がよろしいかと。実は先日、議会で国立学院の専門課程を増やすことが決まりました」

「ああ、そういうえばそんな話があったな」

ギルフォードが思い出したように言うと、ロイズは頷く。

「学院の専門課程っていうと、魔術師科とか騎士科とかですよね？」

リサは、おぼろげな知識を引っぱり出す。フェリフォミア国立総合魔術学院——通称国立学院は、魔術の専門知識やそれを活用できる分野について学べる学校だ。十歳から十二歳までは初等科といわれる基礎学科で学び、十三歳から十五歳でより専門的な課程に進むらしい。

「ええ。現在は魔術師科、魔術具科、騎士科、一般教養科の四コースがあります。今回、新たに料理科を作ろうという話になっているんですよ」

「料理科ですか？」

リサが驚いて聞き直すと、ロイズは続けて答える。

「事の発端は昨年の王宮会談です。晩餐会の料理と舞踏会の軽食を用意するにあたってリサ嬢にご助力いただき、大成功させることが出来たのですが、その後、他国からかなりの数の申し入れがあったのですよ。料理人を我が国に留学させて、料理を学ばせたいと」

「まあ、そんなことが！」

アナスタシアも驚き、目を見開いた。

カフェに料理人がやってきて料理を教えてほしいと言われることはよくあるが、まさか国家レベルでそういう話があったとは、リサも知らなかった。

同時に、数ヶ月前からカフェにやってくるようになった少年の顔が頭に浮かんだ。

料理を学びたいと訴えてきた少年。

彼が国立学院の初等科を卒業するまでにその意志が変わらなければ、何かしらの道を用意すると約束した。学院に料理科が出来れば、それを叶えられる。

「けれど、学院の専門課程は十三歳から十五歳の子供が学ぶのでしょうか？ その歳だと、料理を勉強するには早すぎる気がするのだけど……」

アナスタシアが氣遣わしげに言う。

確かに、とりサも思った。

今しがた思い浮かべていた少年は現在十一歳のはずだが、その聡明さは年齢とかけ離れているので問題はないかもしれない。

けれど年相応の子供として彼の幼馴染の少女をイメージしてみると、料理を専門的に学ぶには早いと思われる。

だがそこで、ふと自分の学生時代を思い出す。

学院の専門課程の生徒は、リサが元いた世界では中学生の年齢に当たる。

リサが中学生だった頃、家庭科で調理実習があった。それどころか、小学校の高学年で、既に調理実習をしていた。

そう考えると、国立学院の専門課程に料理科を設立するというのも無理なことではないような気がしてくる。

「いえ、教える側の配慮次第では無理ではないと思います」

リサが家庭科の調理実習の話をする、他の三人は興味深そうに聞いた。

「なるほど。それと今の話から推測するに、リサ嬢のいた世界の教育機関では、様々な学問を総合的に学べるようになってきているようですね」

「そうかもしれません。深く考えたことはなかったのですが……」

「興味深い。ぜひとも詳しく教えていただきたいが、今はやめておきましょう。本日伺った目的は、その料理科を設立するにあたって、リサ嬢にご協力をお願いするためです。我々としては、リサ嬢を顧問として計画を進めたいと考えているのです」

「ええ！ 私がですか!？」

リサは驚き、他に適任の人がいるんじゃないだろうかと心配になる。

「王宮の料理長であるマキニス氏にも打診しましたが、リサ嬢が適任だと断られました。まずはリサ嬢に声をかけて来いとね」

ロイズはリサの考えを読んだように、そう言った。

「私も、マキニス氏の意見に賛成です。しかも、リサ嬢には調理実習という授業のご経験があるという。設立後は教鞭を取っていただきたいとも考えていたので、やはりぜひともお願いしたい」

「ちよ、ちよ、ちよと待ってください！ 私にはお店があるし、無理ですよ！ 今でも三人でいっぱいなんですし！」

「そうぞロイズ！ 勝手なこと言うなよ！」

焦りのあまりどもってしまいうりさに、それまで無言を貫いていたギルフォードも加勢した。もっとも彼は話そのものよりも、ロイズ個人にいちやもんをつけたいようではあるが。



すると、すかさずアナスタシアが「あなた黙って」と一喝したので、彼はすぐに大人しくなった。「戸惑われるのはもつともですし、そうおっしゃるのも予想していました。答えはすぐでなくて構いません。何しろ料理科設立は、早くとも再来年度ですから、今からだと二年弱はあります」

二年弱という言葉聞いて、リサの肩の力が抜けた。確かに新しい科の設立が、すぐというわけにはいかないだろう。

「それもそうよね。授業の内容も一から考えなきゃいけないわけだし、お料理するための設備も必要よね」

「ええ、授業内容については門外漢なのでなんとも言えませんが、設備に関しては老朽化して使われなくなった棟を取り壊して新しい棟を建てる計画で、その予算も既に確保済みです」

「あら、もう準備万端なのね」

「どうせ、お前が口八丁で予算をもぎ取ったんだろ」

「毒にも薬にもならない事業に充てるぐらいならば、未来ある子供の教育に使う方が、よっぽど有益だからな」

苦々しい顔で吐き出したギルフォードの言葉を、ロイズは涼しい顔で流す。

本当にもぎ取ったんだ……と、リサとアナスタシアは苦笑した。

「そういうわけで、ご検討いただきたいと思います」

ロイズはそう言って話を締めくくった。

その後、ロイズを交えての晩御飯となった。
不機嫌だったギルフォードもその頃には機嫌を直しており、四人で和やかに会話をしながら食事した。

ロイズはリサの世界の教育課程についてあれこれ質問し、ギルフォードとアナスタシアもそれに乗じてリサの幼い頃の思い出を聞いた。

逆にリサも、ギルフォードとロイズの学生時代の話を聞くことが出来た。

食事の間は、料理科の話は出なかつたので、心おきなく楽しい時間を過ごしたのだった。

第四章 リサも悩みます。

ロイズから料理科設立の話聞いた翌日。

リサは久々に、王宮の厨房を訪れていた。

目的は、料理長を務めるイアン・マキニスに会うこと。

ロイズは初め、彼に料理科の話を持っていたと言っていたし、マキニスは長年、王宮の料理人を育てている。

これまで数十人もの料理人を指導してきた彼は、自分よりもよっぽど料理科の顧問に適任だとリサは思っていた。

「こんにちはー」

リサが厨房に顔を出すと、彼女のことを見知っている料理人達が、元気よく挨拶してくれた。

「リサさん、今日はどうしたんですか？」

一人の料理人が、突然やってきたリサに不思議そうに尋ねる。その目には、ほのかな期待のようなものも表れていた。

「ちょっと料理長に話があつてね。これからカフェの営業だから、長くはられないんだけど」

「そうなんですかー」
いかにも残念と言わんばかりの彼の反応を、申し訳なくも嬉しく思い、リサはついフフッと笑ってしまふ。

彼はすぐに気を取り直し、「料理長呼んできますね！」と犬のように飛び出していったので、リサはますます笑ってしまった。

ほどなくして、彼はだいたい年上の料理人を連れてきた。

「久しぶりだな、来ると思ってたよ」

「ご無沙汰してます、マキニスさん」

コック服を着ていなければ、とても料理人とは思えないがっしりとした体格の男性。彼が、イアン・マキニス料理長だ。

彼は、少しの間厨房を離れると部下に言い、リサを伴って外に出た。

「すまん、こんなところで」

「いえ、私もこれからカフェの営業なので、ゆっくりお話するというわけにはいきませんから」
マキニスとリサは、通用口の横に無造作に積まれている木箱に腰かけた。

「あれだろ？ 料理科設立の話」

「そうです。断ったんですって？ マキニスさん」

「ああ、俺よりもリサ嬢の方が適任だと思っただけだから」

「私はマキニスさんの方が適任だと思います。長年、料理長として新人を指導してきたご経験もありますし」

「まあ、そこはな。けど、ここに入るのとはとくに成人した奴らばかりだ。学院の専門課程で教えるのは、それより三つ以上も年下だろ？ そんな子供に教えたことはないし、第一ビじられるだろうしな」

彼が冗談めかして言ったので、リサはつい噴き出してしまった。

マキニスは、その体格もさることながら、顔も厳つい。筆で描いたかのような太い眉。鋭い眼光。持ち前の低い声で怒鳴られたら、子供などひとたまりもないだろう。

こないだ生まれた孫にも初対面できゃんきゃん泣かれたと嘆くので、リサは笑いが止まらなかった。

「ま、俺の見てくれはともかく、リサ嬢の方が向いているよ。といつても、もちろん俺も協力するぜ。カフェの従業員は増やさなきゃならんだろうが、今から準備すれば十分間に合うと思うぞ」

諭すように言われたリサは、曖昧に笑った。

お互い仕事があるため、あまり長くは話せなかったが、リサの心は少し軽くなった。ただ、それでも困惑したままであり、憂鬱な気分出勤した。

「リサさん、こぼれてますよ」

そのジークの声で、リサは我に返った。

水を注いでいた鍋は、満杯どころか既に溢れている。

リサは慌てて水を止めたが、どのくらい無駄にしたんだろうと後悔した。

「大丈夫ですか？ この間はヘレナでしたが、今日はリサさんの気持ちはどこかに飛んでいますね」

「あはは、ごめんね」

ジークから心配そうな視線を向けられ、リサは苦笑する。

そのとき、ヘレナが空いたお皿を持って厨房にやってきた。

「どうしたんですか？」

調理の手を止めている二人を、ヘレナは見つめる。

「いや、リサさんがこの間のヘレナみたいに上の空だったから、俺もどうしたのかと思って」

「ええ！ リサさん、もしかや恋ですか!？」

リサの方に身を乗り出すヘレナ。その目はきらきらと輝いている。

「えー！」

リサが否定しようとする、その前にジークが驚きの声を上げた。

「……いや、違うけど……」

リサがぼそりと言うと、ヘレナとジークは同時に「はあ」とため息を吐いた。二人の反応に、リサは首を傾げる。

「なーんだ、と残念そうに言っつて、ヘレナは厨房を出ていった。」

「どうしたの、ジークくん」

「いや、なんでもありません」

そう言っつて、ジークもそそくさと自分の仕事に戻っつていく。

「……なんなんだ、この二人……」

リサはもう一度首を傾げつてから、気合を入れ直して、目の前の仕事に集中した。

「料理科、ですか」

カフェの閉店後、リサはヘレナとジークに料理科設立の件を話した。

マキニスからも二人には話した方がいいと言われたし、自分だけの問題ではないと思っつたからだ。

「すごいですね！ 国立学院に専門課程が新しく出来るのつて、何十年ぶりとかがじゃないですか？」

「私もよくわからないけど、そうみたいだね」

「ジークさんは、あそこの騎士科を卒業したんですよね？」

「ああ」

「あれ、ヘレナは？」

「私は学院じゃなくて、中央女子学校を卒業しました」

「へえ、そうなんだ。女子学校つてことは、女の子ばかりか」

「そうですよ。うちは父親だけだから、ちゃんと女の子らしいことを勉強して来いっつて言われつて……本当は、学院に通いたかつたんですけどね」

ヘレナが言うには、ジークの母校であるフェリフォミア国立総合魔術学院とヘレナの母校であるフェリフォミア中央女子学校の他にも、学校はいろいろあるようだ。

ただ、国立学院は他の学校よりもレベルが高く、就職率も高いらしい。国の要職についている人の多くが、学院の出身だと言っつう。

「そんなすごい学校だつたんだね……」

それを聞いて、リサはますます今回の話が自分には重すぎると感じた。

「その料理科を設立するのに私が顧問になるなんて、やっぱり無理だよ……」

「ええ!？」

頭を抱えるように呟いたリサの言葉に、ヘレナとジークは驚愕する。

「すごいじゃないですか。リサさん！」

「へ？」

ネガティブな方向に考えているリサと正反対に、ヘレナは明るい声で言っつた。

「去年の各国王宮会談でも大活躍だつたから、当然という気もしますけど、すごいです！ リサさんの料理が認められてるつてことですよね！」

まるで自分のことのように喜び、笑顔ではしゃいでいるヘレナを見て、リサは呆気にとられた。そんな反応をされるとは思わなかったのだ。

ジークも納得したように頷く。

「そうですね。新たに設立するということは、国家として食事情の改善に力を入れるということでしょう。リサさんがこの店を開いた目的とも合致しますし、願ってもないことではないですか？」

確かに、ジークの言うことはもつともだ。

そもそもこのカフェ・おむすびは、リサが元いた世界とあまりに違う食事のレベルにショックを受け、その改善のために開いたのだから。

「料理料が出来ること自体は喜ばしいけど、私を中心についていうのは無理でしょ。この店だけでもいっぱいいっぱいだし……」

明らかに、キャパシティーを超えている。リサは二人が思っているほど、大した人間ではない。リサの料理の知識や技術は、元の世界では取るに足らないもの。

けれど、こちらの世界では違う。新しい味だ、斬新な調理法だと賞賛される。

初めのうちは素直に嬉しかったし、クロード家の人達やカフェのお客さんに笑顔で食べてもらえると、作ってよかったと心から思えた。

一時は、「こんなに喜んでもらえるなんて、自分はなんて良いことをしているのだろう」と驕ってさえたのだ。

けれど、その後によつてきたのは底知れない恐怖だった。

新しいものが出れば、元あったものは古くなる。当たり前のことだが、リサはそれを改めて思い知らされた。

——カフェを始めて一年。

ありがたいことに常連客も出来た。彼らがカフェの料理を好んで通ってくれるのはもちろん嬉しい。

けれども、彼らは次第に既存のメニューに飽きてくる。

来店するや否や、まず新メニューはあるかと聞かれ、リサは新しい味を求められていることをひしひしと感じていた。

寄せられる期待と、そのプレッシャー。

いつまでやれば、どこまでやれば……

問題から目を背けていても、心のどこかでもう一人の自分が嘆いている気がしていた。浮かない顔のリサをよそに、やや興奮気味のヘレナが「ハイ」と言って手を上げる。

「やっぱり、これを機に従業員を増やすべきじゃないですか？ ほら、私も結婚して仕事を辞めるかもしれないし」

「ヘレナ、結婚するのか？」

「いつかですよ、いつか！ 彼にはこの間フラれたばかりだから、当分ないですけどね」

「あのときぼーっとしていたのは、それが原因だったのか」

ジークの言葉にあはは、と笑いを返したヘレナに、あの日の陰はない。

吹っ切れたんだな、と思い、リサは安心した。

「ヘレナの結婚は置いて、従業員を増やすのは俺も賛成です。いつまでもこの三人でというのは難しいと思います。もし、このうちの誰かが病気にでもなったら、店は回らないでしょうから」「うん、それもそうだね」

「私の結婚は置いてってなんですか！」と憤慨するヘレナを、リサは笑いながらなだめる。そして夜も遅いからと、それぞれ家路についた。

第五章 面接は大変です。

翌日、新しい従業員の募集を開始した。募集人員は、接客担当一名と調理担当一名の、合計二名だ。

条件は、「出来るだけ長く働ける人」。そして人材教育に時間が取れないので、「経験者に限る」。さっそく、店の外と中に募集要項を貼り出した。

すると、すぐに数件の応募があった。

面接希望者の名前を聞いて、三日後の開店前に面接をすると伝える。

噂を聞きつけたのか、翌日はもっと多くの人が訪ねてきた。

募集を開始してたった二日間で十数件もの応募があり、リサはかなり喜んでいた。

ジークもヘレナも、今回のように募集して採用したわけではない。ジークは押しかけてきたようなものだし、ヘレナは罪を償うために働き出したのだ。

きっかけはどうあれ、二人とも今ではかけがえのない仲間だ。今回採用する新しい従業員も、そうなってくれることをリサは期待していた。

だが、現実は甘くなかった。いや、もしかしたら期待しすぎたのかもしれない。

面接当日、店の前に集まった応募者達を見て、リサはぎよつとした。

事前に知っていたことだが、応募してきた人のほとんどが女性。カフェのお客さんは女性が多いので、そうなるのは予想していたし、全然構わない。

ただ、その外見が問題だった。彼女たちは非常におしゃれだったのだ。おしゃれであるのは悪いことではない。

けれど、「デートですか？」と聞きたくなるほど気合の入った格好の女性達を見て、彼女達が本気で飲食店の従業員になりたがっているとは思えなかった。

もちろん全員がそうというわけではないし、もしかしたら、外見によらずいい人材もいるかもしれない。

せつかく来てくれたんだしと、とりあえず全員を店に入れた。

適当に席に座ってもらい、一人ずつ二階に呼んで面接を始める。

名前、年齢、経歴、志望動機などを聞く。

志望動機については、どの子も似たようなことを言っていた。それについては、リサもそれほど

気にしなかった。かつて自分がアルバイトや就職の面接を受けたときも、そんなことを話したと思
う。

だが、ひどかったのは彼女達の匂いだ。どの子も、例外なく香水がキツイ。
さらに一人ずつ観察してみると、みな手の爪を長く伸ばし、ピカピカに磨き上げている。手入れ
をしているという点では良いが、飲食店での接客には不向きだろう。

全員の面接が終わると、リサは精神的な疲労を感じながら二人に顔を向けた。

「……どう思う？」

リサが聞くと、ヘレナはげっそりとした顔で答える。

「リサさんが考えてることと同じだと思います」

ジークは匂いに酔ったらしく、眉間に指を当てて険しい顔をしている。

「とりあえず採用者なしということで、あの子達を帰しましょう」

「そうですね、これから開店準備もしなきゃですし」

偶然にも、三人揃って「はあ」とため息を吐いてしまった。

三人は一階に下りる。そして、リサは応募者達に告げた。

「皆さん、今日はお越しくださってありがとうございます。ごさいました。検討した結果、残念ながら今回は採
用を見送らせていただくことになりました。ご希望に添えず申し訳ありませんが、今後もお客様と
して、ご来店いただけましたら幸いです」

声に出して残念がる人、さっさと帰り支度をする人、なぜか嬉しそうにこちらを見ている人など

反応は様々だったが、総じて本当に働きたかったようには、やはり見えなかった。

そのとき、一人の女性がおずおずと言った。

「あのお、最後にジークさんと握手させてもらってもいいですか？」

彼女は、期待を孕んだ目でジークを見つめている。

「あっ！ 私も」

「ずるい！ ジークさあん！」

一人が言い出すと、みんな我も我もとジークに群がっていく。

ジークは怯んで後ずさった。

だがそんなことはお構いなしで、女の子達は勝手に彼の手を握り始める。

——ツキン。

リサの胸に、痛みが走った。

不思議に思っ、リサは自分の胸を押さえる。

痛みはそれっきりだったが、胸の内にじわじわと、黒い霧が広がっていく。

リサはその感情に覚えがあった。——嫉妬だ。

「ああ」とか「いや」としか言わないジークに、懸命に話しかける女性達。みな一様に目をキラキ
ラさせていて、彼に想いを寄せていることがわかる。

ジークの心中はどうあれ、今、彼のそばにいるのは、リサではない女の子。

「はいはい、すいませんが、この辺でお引き取り願います！」

ヘレナがそう言つてパンパンと手を打ち鳴らしたので、リサはハッと我に返つた。

ジークも助かったというように、素早く人垣を抜け出してくる。

女の子達は「ええ〜!!」と残念そうな声を上げたが、渋々引き上げていった。

彼女達が帰つても、店内には残り香がしぶとく漂^{たぐよ}っていた。

「予想はしてましたが、これほどとは思いませんでした」

「予想つて？」

換気のため窓を開けていたリサは、ヘレナの言葉に振り返つた。

「どんな応募者が来るかということですよ。今日来た子達は、この店で働くのがステータスだとも思っているんですよ。制服が人気ブランドであるシシルメリー製というのは有名ですし、お菓子は王宮御用達^{てうた}。そう思われても仕方ありません。それに、ジークさんの人気。元騎士という経歴に加えて、あの見た目です。ジークさん目当てに来ているお客さんも多いですね。面接に落ちても、あわよくば彼とお近づきに……なんて思っていた子もいるんじゃないですか？」

ヘレナはべらべらとしゃべりながら、憤慨^{ふんがい}した様子でテーブルを磨^{みが}いている。

今回の応募者は、ほぼ全員が接客を希望していた。

飲食店の接客は、そう簡単なものではない。

可愛い制服を着てにこにこ笑つていても、その仕事は肉体労働に他ならない。ケーキや飲み物を載せたトレーはそこそこの重さがあるし、注文のたびに厨房^{ちゆうぼう}と客席の間を往復するので、一日中

歩きっぱなしだ。

面接に来た女の子達に、その覚悟があるとは到底思えなかった。

接客を担当するヘレナは、リサよりも強くそれを感じたのだろう。残念に思う気持ちを通り越して、怒りすら覚えているらしい。

それでも、いつも通りちやきちやきと働くヘレナを残し、リサは厨房に向かった。

——しかし、ジークくんを、ねえ……

ジークは、先ほどの面接のことなど忘れたかのように、ランチの準備を始めていた。葉野菜をちぎってポウルに入れるその横顔は、無表情だが綺麗に整っている。

ほぼ毎日会っているので意識していないが、彼は紛れもなくイケメンだ。混雑しているときは彼も接客に回るが、接客を受けた女の子が、ポーツとなつていることも多い。

——けど今までは、感じなかったのになあ……

さっきの嫉妬は、いったい何だったのだろうか。

「どうしたんですか？ リサさん」

厨房の入口に突っ立ったままのリサを、ジークが手を止めて振り返つた。

「ごめんごめん、私はスープ作るね」

リサはなんでもない風を装^{まか}って、彼に笑いかけたのだった。

第六章 使者、来訪しました。

料理科設立の話聞いてから一週間が過ぎ、リサはそろそろ返事をしなければと思っていた。考えた末、断ることにしたりリサは、ロイズに宛てて断りの手紙を書くためペンを取る。書き出しの文章を考えていると、部屋のドアがノックされた。

「お嬢様、今よろしいでしょうか？」

ドア越しに聞こえてきた声は、侍女長であるマリーのものだ。

「マリーさん、どうしたんですか？」

「奥様がお呼びです」

「シアさんが？」

手紙は後で書けばいいかと思い、リサは部屋を出てマリーの後についていった。どうやら、アナスタシアは応接室にいるようだ。

——またロイズさんがいらっしやってるのかな？ だったら直接お断りしよう。

そう思ったが、リサを待っていたのはロイズではなかった。

応接室でアナスタシアの向かいに座る壮年の男性。ロマンスグレーの髪と銀色の瞳をもつ彼の表情は柔和で、眼鏡の奥にある眼差しは温かい。

けれど、リサの人となりをはかるように、じつと観察しているようなところもあった。

「リサちゃん、こちらへいらっしやい」

アナスタシアが手招きしたので、部屋の入口に立っていたリサは彼女の隣に並んだ。

「この子が娘のリサです」

「初めまして、リサです」

「お初にお目にかかります。わたくしは、ルシウス・ザハーと申します」

彼は、洗練された礼をもって自己紹介をした。

「ルシウスさんは、王宮の侍従長を務めている方なのよ」

「ほほほ、もういい年なので、そろそろ引退しようと思ってるんですけどね」

アナスタシアが紹介すると、ルシウスは穏やかに笑った。

その肩書きを聞いて、リサは疑問を浮かべる。

王宮の侍従長が、どのような用事で訪れたのだろうか。

お互いの自己紹介が済み、リサがソファに腰かけると、ルシウスが切り出した。

「先ほどアナスタシア様にはお伝えしたのですが、ご本人にも直接お伝えしておきたいと思いで、ご同席いただきました。まだ内々のお話なのですが、リサ様にエドガー王太子殿下との縁談話がございます」

「縁談……ですか？」

「私も驚いたのよ！ まさかそんな話があるなんて！ アデルと冗談で『私達の子供が結婚したら

「親戚になれるわね」と話したことはあるけれど……」

エドガー殿下とは、各国王宮会谈の準備のために王宮の厨房ちゅうぼうに出入りしていたとき、何度か会ったことがある。

それに会谈のときの舞踏会では、リサのエスコート役も務めてくれた。

「アデル王妃殿下から、ぜひにというお言葉がございましたので」

「はあ」

実感がわかず、リサは気の抜けた返事をする。

——側室とか、そういう話だろうか……

「エドガー殿下は、ゆくゆくは王位を継がれます。もし縁談がまとまれば、リサ様は未来の王妃になられるのです」

リサの考えを否定するように、ルシウスは言葉を重ねた。

——未来の王妃……私が？

リサは、ぼかんとした表情でルシウスを見つめる。

「失礼ながら、リサ様は現在、お付き合いされている男性はいらっしゃいますか？」

「いえ、いませんけど……」

「さようでございますか。安心いたしました。エドガー殿下とは何度かご面識もおありでしょうか、人となりはご存知ですね。ご年齢も近くていらっしゃいますので、良きパートナーになれるのではないでしょう」

「エドガー殿下は、確かりサちゃんの一つ年上だったかしら。以前、リサちゃんをエスコートしていたとき、二人で並んだ姿はともお似合いだったわ」

アナスタシアは胸の前で手を合わせて、嬉しそうな声で言った。

あの日、エドガー殿下の隣に並んでどうにか格好がついたのは、アナスタシアとアデル王妃殿下、王宮の侍女さん達が見事に飾りつけてくれたおかげだ。普段の自分の容姿では、とても見られなかっただろうとリサは思っている。

突然降ってわいた縁談話に恐縮するリサだったが、アナスタシアは大変乗り気のようなのだ。

ルシウスは「ぜひ前向きにご検討を」と言い残し、帰っていった。

第七章 悩んでいるときはメレンゲ作りに限ります。

シヤカシヤカシヤカと、金属がぶつかる軽い音がリズムを刻む。

リサは銀色のボウルを抱え、卵白を泡立て器でかき混ぜていた。

普段ならミキサー任せにするメレンゲ作りを、今日ばかりは自分でやろうと思いついたのだ。

今日は休日なので、店にはお客さんも、従業員の二人もいない。

なんとなく自宅にいたくなくて、リサは一人カフエの厨房こどもに籠こもっていた。

だからと言って新しいメニューの試作をする気にもなれず、ただ単純作業をしている。

ここ最近、いろんなことが立て続けに起こりすぎているので、一人で考える時間がほしかった。料理科設立への協力依頼。新たな従業員の募集。そしてエドガー殿下との縁談。

従業員募集の件はともかく、料理科の件と縁談は、はなはだしく身に余る内容だった。

仮にエドガー殿下と結婚したら、カフェの仕事は続けられない。

フェリフォミア王国では、成人している王族はみな政治に関わる。国王夫妻はもちろんのこと、次代を担うエドガー殿下も既に政務についている。その配偶者になれば、リサにも政治的な役割が与えられるだろう。

そんなの考えるまでもなく無理だ。

何しろリサはこの国、いやこの世界に来て、まだ二年足らずなのだ。知っていることよりも、知らないことの方が多い。特に政治に関することは、全くわからない。

それに、リサは侯爵家の娘ではあっても、あくまで養子だ。

もちろんルシウスがそれを知らないはずはないと思うが、やはり王太子のお相手には貴族の血を引くご令嬢がふさわしいだろう。

これが普通の縁談ならば、エドガー殿下は人柄も収入も申し分なく、理想的な相手かもしれない。だが、彼は一国の王太子なのである。

そもそも、エドガー殿下のことを好きというわけでもない。

けれど、すっぱりと断り切れない理由があった。

それは、アナスタシアのあの喜びようだ。

エドガー殿下の母であるアデリシア王妃殿下とアナスタシアは、親友同士である。

もし断れば、彼女が悲しむのではないかと思ひ、踏み切れないのだ。

それに……と、リサは考える。

この世界の人々は、リサが未知の味、新しい味を提供してくれることを期待している。それを嬉しく思う反面、重圧にも感じていた。

エドガー殿下と結婚したら、その重圧から解放されるのではないか。

想像のつかない王太子妃の責務と苦悩よりも、今、心の内に抱える悩みから逃げたくて、リサは流されそうになる。

ハッと現実を意識を戻すと、いつの間にかポウルの中にはしっかりとメレンゲが出来上がっていた。

急に右腕にダルさを感じたりリサは、ポウルを調理台に置く。

ため息を吐くと、シンと静まった厨房に、やけに大きく響いた。

第八章 凶星でした。

——最近の彼女は様子がおかしい。

ジークは、リサに違和感を覚えていた。